

祇園花街の言葉

Monika Kubiszewska

１．はじめに

祇園花街は、祇園社（八坂神社）の西、鴨川の東、四条通りをはさむ地域である。この地域では、お茶屋（揚げ屋）と子方屋（屋形・置き屋）には、芸子・舞子が生活をしている。芸子・舞子は日本の観光の主な役割を果たしているという自覚と誇りを持っている。彼女らは、子方屋お茶屋、女紅場学園において、芸に向かう行儀作法、根本的な心の持ち方を徹底的に躰けられる。集団的な組織のもとで祇園の作り出す遠慮深い情緒を身につけ、仕草、動作、言葉つかいにいたるまで、全ての伝統的な祇園気質を理解しなければならない。厳しくて難しい芸の訓練の後には、ハイクラスの人々に、または、有名人に、直接に触れ合うというプライドがある。ハイクラスの常連客を持つのも祇園だからこそであり、他の花街と比べても、優雅さが感じられる。祇園育ちの内娘が、ほとんど芸子・舞子になるというもの、この地域の世襲性の強さを示している。

２．芸子・舞子の言葉使い

下に書かれた表には、芸子・舞子の言葉つかい社会的な意味と言語的な意味も明らかにする。

表１．芸子・舞子の言葉意味およびその働き

言葉	意味・働き
１．「オカーサン」	子方屋を取り仕切る女主人である。鍛えが見習いを経て芸子や舞子になるとき、衣装、芸事全ての世話する人。
２．「シコミサン」または、「ショジョサン」	昭和はじめの子方屋には、芸子・舞子と一緒に住んでいた人。シコミサンは、芸子・舞子になるため修業した。
３．「ミナライサン」	見習い期間。
４．「オチョボサン」	お茶屋と子方屋の連絡などをした人。祇園花

	街で芸子のお供や使い走りをする少女。現在はいない。
5.「オナゴシ」または、「オナゴッサン」 または、「ゴハンタキサン」	お手伝い。女中。芸子・舞子と仲居にはなれなかった人。
6.「ゴマハン」	朝麻はん。短い時間の花代で、すぐ帰る客。お茶屋にとって望ましくない客。
7. 自前または、抱え	芸子などが独立し、実力で営業すること。
8.「オトッコサン」または、「タイコモチサン」 または、「オッチャン」、「オトコシ」	男衆。お手伝い。花街では、オトコシが芸子・舞子のオヒロメ（披露）に先導する人である。お茶屋への送り迎え、着物の気付けなどを大事なしごととする人。現在では、その数も少なくなった。
9.「ネーサン」	姉芸子。ネーサンと呼ばれるのは、年齢に関係なく、店世出し（店出し）の早かった芸子・舞子である。
10.「シンルイ」	子方屋内や子方屋間での、女主人・姉芸子・妹芸子のような義理関係。その義理関係を表すのに、姉芸子からその芸名の一字を必ずもらうことになっている。 例：「竹葉さんと美代葉さんはシンルイドッセ」などという。 エダハ「枝葉」とかスジとかは姉芸子と妹芸子、子方屋どうし、お茶屋間の系統にいう。
11.「ミセダシ」または、「デル」	店出すしとは、鍛えから舞子・芸子になることである。これを「デル」ともいう。
12.「エダハ」または、「スジ」	（枝葉）とか（筋）とかは、姉芸子と妹芸子、子方屋どうし、お茶屋間の系統にいう。義理関係の系統。 例：「小豆も豆男も豆スジ（豆の字がつく芸名をもつ義理関係の系統。）。である。 「真理子と小真理は同じエダハヤ」。
13.「ワレシノブ」または、「フクマゲ」	お福。舞子が店出しの時結うまげ。京都舞子

	<p>のまげはミセダシ（舞子としての披露）をして数ヶ月の間、ワレシノブに結う。客と馴染ができると、フクマゲ（お福）となり、祇園祭の期間には勝山という特別なまげを結び、紋日の正装には東京でいう高まげに近いヤッコマゲを結う。エリカエ（舞子から芸子になること）が近付くとサツコウマゲになる。これらのまげを、京都舞子特有の京風に地髪で結う。</p> <p>例。</p> <p>「オレ見トミ、ワレシノブに三本足（襟首に三つの線が入った化粧法）の舞子さんが来ヤハッタワ」。</p>
14. 「アブラムシ」	<p>油虫。ごきぶりのように嫌われる客。用事もないのに、お茶屋の座敷から台所へきて、無駄話に時間を過ごす客を嘲っている。</p> <p>例。</p> <p>「こんなところで、うろうろしてたら、アブラムシといわれマッセ」。</p>

3. 京言葉の婉曲性

京言葉、婉曲的に相手に理解してもらうように努めるのである。直接的に伝えるのではなくて、他の人には分からない意志疎通するためのものとても面白い。京ことばでは、直示性を避け、間接性・婉曲性を好むといつてよい。祇園の身振り語はこれの一つの例えになる。さらに、婉曲表現も京言葉の優美性に結びつく要因になっていると思われる。依頼表現や辞退表現には、婉曲的な言い回しが多い。祇園の身振り語を明らかにする。祇園身振り語は、祇園甲部では、芸子や舞子が仲間どうし意志を伝達するように使う。目の前にいる客に対して、口頭語では都合の悪い場合や、芝居見物中のように、話をすることを慎まなければならない時などに、イロハ48文字（45音）の身ぶり語で次のように伝えあう。たとえば、イはイケズの口形、口は櫓をこぐまね、ハは歯を指で示す。また長音の記号はなく、濁音は指で二つ点を打ち、半濁音は指先で○を書くきまりになっている。さらに、これらの身ぶり語を連続して、短い電文程度の意志を伝達する。たとえば、イケズの口形

と矢をつがえる動作を連続してイヤという拒絶を表す。

4．舞子・芸子の生活・職業習慣的な行為

京都の伝統的な職業集団では、それぞれの集団特有の職業語があり、隠語も用いられている。祇園の舞子や芸子職業に就く間にそれぞれ習慣的な行為がある。次にこの行為を明らかにする。

a) 祇園の福笑い

元旦の福笑い。祇園花街の子方屋では、女主人をはじめ内娘の舞子や芸子が雑煮を祝う前に、内娘の舞子や芸子が「オカーサン、オメデトーサンドス」というと、女主人が受けて「オメデトーサンドス、ドーズゴイットーニ（御一統）」という。その後、全員で朗らかに大笑いをする習慣がある。この笑いは、新年の縁起をかついだ福笑いである。

b) 祇園引き祝いのあいさつ

芸子を辞めるときの祝いを引き祝いという。世話になったお茶屋へ、前もって男衆だけであいさつに行く。「〇〇さんの引き祝いドス」といって、赤いオコワ（赤飯）を、「つなき団子」の紋のついたオジュ（重箱）に入れてさし出す。二度と芸子に戻らないときは、シラメシ（白いオコワ）にする。お茶屋は「おめでとうサンドス。オーキニ」と受ける。数日後、引く本人が男衆を伴って正式にあいさつに行く。男衆が「オーキニ。ながながと」といい、本人も「オーキニ。ながながとお世話になりました」という。お茶屋の女主人は「こちらこそ。おめでとうサンドス。」と受ける。

c) 祇園自前披露のあいさつ

子方屋から独立して自前になった芸子は、男衆を伴って、ひいきのお茶屋へひろめのあいさつに行く。男衆が「こんど自前にならハリまして」といい、続いて芸子が「どうぞ、よろしゅうお願いします」という。お茶屋の女主人が「おめでとうサンドス。オキバリヤッシャ」と受ける。

d) 祇園衿かえのあいさつ

舞子と芸子とでは、その衣装は大きく変わる。色ものの衿から、白の衿へ変えるところから、舞子から芸子になる時衿かえといって、祝う習慣がある。衿かえをした芸子が男衆と共にお茶屋を訪ね、まず、男衆が「〇〇さんの衿かえで一」といい、続いて本人が「どうぞオタノ申します」という。お茶屋は「おめでとうサンドス」と受ける。

5．おわりに

研究テーマは、京都の舞子や芸子の言葉にした。但し、文法的な特徴だけではなく、社会文化的な違いにも明らかにした。つまり、社会言語学の視点から、京都の舞子・芸子の言葉と習慣の分析した。舞子や芸子の言語コードの分析をしたり、日本文化や人間関係を解釈したりした。そこで、祇園花街の習慣やあいさつ語などを明らかにした。

6．言葉の定義

一女紅場学園。女子に裁縫うその他の手仕事考えるために、明治初年各地に設けられた女学校。今、京都の舞子の学校にその名が残る。

参考文献

井上口有一・堀井令以知『京ことば辞典』東京堂出版、1992年。

『京ことば京存京英辞典 Okini』UNI PLAN、1995年。